

# 平成 23 年度 第 3 回屋久島世界遺産地域科学委員会

## ヤクシカ・ワーキンググループ議事概要（案）

日時：平成 23 年 6 月 19 日（日）10:00～12:00

場所：宝山ホール（鹿児島文化センター）

### 1. 目標頭数について

- ・シカの数自身が目的ではなく、植生を含めた生態系保全が目的である。その暫定数値として 20 頭/km<sup>2</sup>等の数値が挙げられている。それは各地域によって違う可能性もあり、当面のこととして設定している。
- ・目標は仮にでもいいから定め、そのために何が必要かという議論が必要になる。地域別の面積、地形等により、そこに大体どのくらい生息数があると推定できるのか、捕獲数を何頭と設定するのか等、今後どうすべきかということを議論して、初めてその地域の優先度が決まっていく。

### 2. 順応的管理について

#### (1) 全般的なこと

- ・植生のほうの指標をどうするべきかということが知床でも議論されている。植生がどの程度回復すれば良いかという視点である。
- ・シカの密度が目的ではない。当面、生物多様性を守るためである。
- ・実現可能性を見極めて、議論を進めていくのが大事である。
- ・シカがあまりに少ないと、林床がものすごく茂ってしまって、大型の植物が増えるため、小型の植物はかえって減ってしまうという面がある。
- ・昨年度と同じくらいの捕獲努力（日数、人数等）で捕ってみて、それがシカの減少につながるのかという判断をすることと、2年間（昨年と本年）そのレベルで捕獲したときに、絶滅危惧種の成長、林床植生のシダ類等にどういう効果が出るのかというのを見極めることが、現時点でかなり有力な判断になると思っている。

#### (2) シカについて

- ・高標高地における捕獲方法の検討も必要である。
- ・重い材木を山のかなり上のほうから切り出していることから、例えば、わなで捕獲したシカを降ろせる気がする。考えれば、いろいろな方法があると思う。
- ・スマートディア化なども考慮しながら、管理計画を練っていくというふうになれば良い。

- ・ 適正頭数は、10 頭/km<sup>2</sup>かもしれないし、15 頭/km<sup>2</sup>かもしれないしという程度の筋である。20 頭/km<sup>2</sup>という数字の根拠は、塩谷さんが調べたデータで、南部を平均したものである。
- ・ シカの特性として、局所的に高密度化状態、まばらに分散しているという分布状態が存在する。また、植物への採食圧に蓄積的に影響が出てくることが多いという2つの特性がある。それを考えたら、きちんとモニタリングをして、効果を目に見える形で測定しないといけない。場所ごとに目標を小刻みに短期及び通期で捕獲をどれくらいかけるかということをも密に議論する。またフィードバックをして管理体制を作っていないといけない。
- ・ 捕獲圧の及ぶ範囲の考え方を整理する。
- ・ 捕獲圧範囲推定図で捕獲圧をかけることで、ある程度、全島的なトレンドも変えていける可能性があると考えている。
- ・ 中低標高部で集中して捕獲すると、比較的低コストで効果が見られるのではないかと期待を持っている。

### (3) 絶滅危惧植物等について

- ・ 絶滅リスクという点からすると、絶滅危惧植物が残っている場所については、少しでも回復させるべき状態にあるので、目標設定という議論はして来なかった。
- ・ 指標としてどれくらい回復しているかというのを見るのは大変重要である。
- ・ 非常に危機的な状況の絶滅危惧植物については、指標として使うには、あまりにも危険が多いという面があるので、シカの管理とともに、緊急避難的に囲うということが事実上の方策としては必要だと思う。
- ・ 絶滅危惧植物に関しては、ヤクシマタニイヌワラビ等一番危機的なものについては、絶滅しないような対策は一応とってある。しかし、柵の数をもう少し増やしたほうがいいのは事実。小杉谷、安房林道沿い及びヤクスギランドの流域でももう少し増やせば、保護の努力が実り、確実に増やせる。

### (4) その他

- ・ 西部林道は、土壌崩壊、カシノナガキクイムシによる被害等、非常に危機的なものがある。管理局の取り組みをより強化して欲しい。

## 3. モニタリングについて

### (1) 全般

- ・ 昨年と同レベルの捕獲努力をかけて、その効果を検証する。特に、モニタリングの仕方については、メール等でも協議して、林床植生、あるいは絶滅危惧植物、あるいは

表土流出についての評価方法を決めて、2年間の捕獲の効果を見るということ、科学委員会としての基本的なアドバイスにさせて頂ければと思う。

- ・細かいそれぞれの地域の考え方については、一方では、この案を公表させていただいて、いろんな方から意見を伺うということと平行して、科学委員会の中でもう少し詰めて、複数の案の中からどれがいいのかというのを、この一ヶ月ぐらいのうちにメール協議で判断させて頂く。
- ・環境省の愛子プロジェクトの隣接地域等、重点地域になると思うところでは、植物も含めてきちんとモニタリングを行いながら、管理者の情報公開を密にしながら行っていくことが重要である。
- ・調査体制について、さまざまなモニタリング調査が行われているので、それを調整して、実際に全体として非常に効率よく、コストをかけずにモニタリング体制を構築したい。
- ・調査方法の統一を改めてしていきたい。

## (2) 調査について

- ・捕獲目標を設定していくことについて、それを検証していくうえで追跡していかなければいけないのが、シカの密度の変化と、個体群の増加率及び捕獲圧の分布である。これに関する推定に必要なデータをとっていく。
- ・シカの密度のモニタリングとしては、60地点ぐらいの調査を継続していく、それは1つの組織ではなかなか難しいので、特定計画を作る鹿児島県を含めて、森林管理局、環境省、で分担し合ってやっていくという体制をつくりたい。
- ・皆が予想していたよりもシカを捕獲することができた。これは成功事例である。あとは、情報公開を早急に行うようにして関係者に伝わるようにする必要がある。
- ・スポットライトカウント法は時期を統一して続けていくと、糞粒、糞塊のデータを評価する結果として得られると思う。
- ・狩猟カレンダー調査を導入して、複数の指標で密度の変化を評価できるような形にもっていききたい。
- ・捕獲個体調査について、個体群の増加率を推定していく上で、屋久島で欠けているのが、齢別の妊娠率である。年齢と妊娠率の調査をしっかりとやりたい。評価するためには、調査数が3桁必要。
- ・シカに関するモニタリング手法の中で成否の効果測定ができるのは、スポットライトカウント法だけなので、雄、雌、子供に分けて記録しモニタリングに活用できるとよい。

## (3) その他

- ・土砂、土壌がどう流出しているかを、モニタリングや現状把握できるのなら行いたい

と思う。

- ・ 土壌流出に関しては、丹沢でもやっているが、くいを打って、去年に比べて何センチ余計に露出したとか、そういうように調査はやられているので、屋久島でもできると思う。
- ・ 余力があれば、成長、植生、栄養状態等の調査も含めて今後やっていきたい。

#### 4. 確認事項

- ・ 前回のワーキンググループにおける主な意見は、資料を確認し気づいた点等があれば後ほど指摘する。
- ・ 高層湿原に保護柵を設ける箇所で、捕獲は考えていないのか確認したい。
- ・ 鹿児島県では、林業被害の最近の金額はゼロであるが、林業被害はなくなったとみていいのか確認したい。
- ・ モニタリング手法については、メール協議で進めさせて頂く。また関係機関のところで、どれだけのところができるのかという問題もあるので、その辺の調整もさせて頂きたい。

#### 5. 今後のスケジュールについて

- ・ 第4回の会合を科学委員会に合わせて12月に予定している。
- ・ 委員長視察という形で、西部と奥山と比較ポイントになる安房林道等見させていただき、現場に即した判断をしたい。他の委員もスケジュールの都合がつけば、参加して欲しい。
- ・ スケジュールに関して、鹿児島県から特定計画が具体化されるが、第4回の会合とうまくタイアップするように、開催時期を検討して欲しい。